

# 「活到老、学到老」

西川 孝次

表題に掲げた「活到老、学到老」は「人生、死ぬまで勉強」という意であるが、最近とみにその感を強くしている。英中二言語を少々かじっただけで、身の程知らずにも教壇に立ち、長い年月が過ぎたが、結局わからないことばかりだということに気付かされ、自らの不勉強をおおいに恥じ入っている。今後、この言葉を銘に、初心に戻って学びなおそうと己を励ましている次第である。孔子様に遅れること五十年、まさに「吾六十有五にして学に志す」という心境だ。

本来なら、なにがしかの研究成果を発表し、それを世に問うというのが本誌執筆者に求められるのであろうが、一定期間言語教育センターの事業に関わってきたことに免じて、このような駄文の寄稿を特別にお許しいただいた。

以下、中国語という言語とその背景にある中国の社会、文化に関して、いくつか感じていること及び今後の「学習研究課題」を並べ、読者諸氏の教えを乞いたいと考えている。

## (1) 道路名から見える不思議な現象 --- 背景には何があるのか。

上海に行くたびに感じるのは、「南京路」とか「四川路」といった他所の地名を冠した道路名が非常に多いことだ。地図を見ながら、暇に任せて数えてみると、東京山手線の内側に相当する中心部だけで56本もの道路にそういった名がつけられている。使われていないのは北端の黒竜江省と南端の海南省にある都市名ぐらいのものだ。天津や青島も、上海ほど多くはないが、同じように他都市の名前を道路名として使っている。考えれば、これらの都市に共通するのは、清朝末期に列強に開港を強いられ、半植民地の典型的な都会として発展してきたという点である。地方から流れ込んだ人々と縁のある地名が道路名として使われたのか、急速に膨張したため、便宜的に付けられたのかは知る由もないが、面白いことに、逆に「上海路」とか「上海街」などと「上海」という都市名を道路名に使っている都市は少なく、北では吉林（吉林省）、大連、錦州（遼寧省）、銀川（寧夏回族自治区）といった長城の外側、南では遵義（貴州省）、桂林、北海（広西壮族自治区）と、いわば伝統的中華世界の周縁部にある都市ばかりである。恰も、成り上がり新興都市の名前など冠してられないという、長い歴史を持つ町の自負心が表れているかのようだ。

それに比べて、「北京路」、「北京街」などと首都北京の名前を道路名に使っている都市は結構多いのだが、豊かな地域である江蘇省、浙江省、福建省、山東省、広東省の都市には一つもない。七大古都（安陽、西安、洛陽、開封、杭州、北京、南京）では、ただ一つ南京到北京路というのがあるが、それ以外はさすがに北京より先に都が置かれていたという歴史があるためか、北京という名をつけた道路名はない。「大江戸通」などという道路名を京都市内につけられないようなものだ。逆に首都北京には、地方都市の名前を冠した

e-mail:kouji-n@apu.ac.jp

道路など一本もない。

革命の聖地・延安の名前もどういいうわけか、広東省、湖南省、江蘇省、四川省の都市にはない。それぞれ孫文、毛沢東、周恩来、朱徳といった中国革命の立役者の故郷なのに、である。

一方、新中国になって、新しい社会を建設しようという意気込みを感じさせる道路名がたくさんつくられた。「解放」、「人民」、「和平」、「勝利」、「友誼」、「紅旗」、「新華」、「團結」というのがベスト8で全国津々浦々どの町にもこういった名前の道路があるのだが、政治都市・北京には、新しい道路が次々と作られているにもかかわらず、このような政治スローガンを連想させるような道路名は一本もなく、清朝時代からの由緒ある道路名が多く残されている。

地名は歴史、文化そして政治を反映しているといわれるが、それぞれの町で何をどのように反映しているのか、是非とも探求したいことの一つだ。

(2) なぜ地名には、n音やng音がこれほど多く使われるのか。

上に挙げたベスト8の道路名を現代標準音で読めば、「友誼」以外の語にはすべて鼻母音のnもしくはngの音が入っている。カタカナで表記される中国の地名はやたらと「ン」が多く、覚えにくくて仕方がないとよく言われるが、本当にそうなのか探ってみた。

普通話と呼ばれる現代中国標準語では、子音と母音を組み合わせることができる単音節が406種類ある。そのなかで、鼻母音n、ngを含む単音節は165種類存在する。

中国で一番よく売れている最新の『新華字典』第11版には、406の音節のいずれかで発音される漢字としては9,438字が収録されている。<sup>2</sup>ここには人名、地名にしか使われない文字や元素記号のような日常生活ではあまり使われない文字も含まれているが、とりあえず一文字＝一語ということを進める。

中国語は元来単音節で語彙をつくり、それに対応する文字を持つのだが、この406種の単音節に、すべての語（漢字）が均等に散らばっているかというところではない。例えば、nuanという音節には「暖」の一文字（語）しか収録されていない一方で、yiという音節には148、jiという音節には136もの文字（＝語）が収められている。そして、鼻母音n、ngを含む音節には3,567字（＝語）が収録されている。

この9,438字（語）を使って二音節語を作ろうとすれば、論理的にはその組み合わせ分だけ、すなわち89,075,844（＝9,438×9,438）語、作れることになる。一方、鼻母音n、ngを含む音節は3,567字（語）あるから、二音節とも鼻母音あるいはどちらかの音節が鼻母音である二音節語は54,607,203も誕生可能となる<sup>3</sup>。全体に占める比率は約61%だ。

つまり、単純な組合せ論からいうと、中国語の二音節語の約60%は鼻母音を含んでも不思議でも何でも無いということになるのだが、地名の場合、この比率を上回るのだろうか。そこで中国国家统计局が公開している資料<sup>4</sup>を基に以下の条件で地名を収集し、計算してみるとおもしろいことがわかる。

## &lt;収集の条件&gt;

- 1) 二音節、つまり漢字二字で表記されている行政区名称  
少数民族の言語をもとにつくられた行政区名を除くために、便宜的に①、②の行政区は収集の対象外とする。
  - ①新疆ウイグル族自治区など5つの民族自治区の名称及びその自治区内にあるすべての行政区名称
  - ②民族自治区以外の24省のうち、県に相当する民族自治州についてはその自治州の行政区名および当該自治州の管轄地域内にあるすべての行政区名称
- 2) 香港、マカオ特別行政区、台湾内のすべての行政区名称を除く。
- 3) 一級行政区といわれる北京、天津、上海、重慶の中央直轄市名、24省の省名および中央直轄市の区、地級（県、市、区）レベルの行政区名称

結果は下表のとおり、行政区名の8割以上がn, ngの鼻母音を含み、そのうち31%が二音節とも鼻母音を含む音で構成されていることがわかる。たしかに、「やたらと『ン』が多い」という印象を与えるのも理由のないことではない。

型	例	比率	数
n+n	深南（県）Luan nan/唐山市	84%	115
n+ng	南通（市）Nan tong/江蘇省		177
n+X	殷都（区）Yin du/河南省安陽市		223
ng+n	静安（区）Jing an/上海市		180
ng+ng	青陽（県）Qing yang/安徽省池州市		211
ng+X	長治（県）Chang zhi/山西省長治市		272
X+n	桃源（県）Tao yuan/湖南省常德市		274
X+ng	枣庄（市）Zao zhuang/山東省		398
X+X	武侯（区）Wu hou/四川省成都市		16%
総計		100%	2,205

n = 鼻母音 n を含む音節の字（語）

ng = 鼻母音 ng を含む音節の字（語）

X = 鼻母音以外の音節で構成される字（語）

地名は歴史的な由緒、伝説、その他、縁起がいいとか、快適さといったことを連想させる字が使われるからなのだろうが、そのことと鼻母音とは何か関係があるのだろうか。昔から連綿と続く名前であれば、当然現代音ではない音韻で読まれていたことを考えねばならないが、それにしても8割を超えるというのはやはり多いといえる。地域差はあるのか、人名ではどうなのか、一般語彙ではどうなのか、これからゆっくりと観察してみたいと思う。

## (3) 修飾・被修飾の面白い関係

豊前・豊後、肥前・肥後、越前・越後、近江・遠江、陸前・陸奥といった国名表示は、

京都を基準点にした位置関係を示す、いわば「中央の権威」を見せつける命名であるが、この伝統は明治以降も引き継がれ、鉄道の世界では、東京を中心に「上り列車」、「下り列車」という表現まで作られた。駅のプラットフォームにもその表示がされている。ところが、中国では「上り列車」、「下り列車」という言葉がないことはないが、あまり定着していないようで、駅の表示ではまずお目にかからない。北京へ行く列車はあくまで「開往北京」であり、北京から西安に行く列車は「開往西安」だ。上下関係を連想させる「上」や「下」は、まるで広東人や江蘇人の怒りを避けるかの如く、姿を隠す。「上京」、「下乡」という言葉があるにもかかわらずだ。

そこへいくと、東西南北には「上下関係」を連想させる要素が少ないためか、地名表示にはよく使われるが、面白い現象に気づく。

駅名を例にとると、中国では、杭州东站、上海南站、北京西站、天津北站と例外なく「地名+方角」という順に並べられる。中国語も日本語と同様、連体修飾の場合、修飾語+被修飾語という順に言葉が並ぶので、杭州东站は杭州の東駅ということになり、杭州市内の東部に位置することを明示している。

ところが日本では東別府、西大分、南小倉、北延岡と「方角+地名」という順に並ぶ。4,524あるJR旅客駅のうち、「地名+方角」という順に並ぶのは博多南、天童南、十和田南、伊那北、野原西（根室本線）、河合西（加古川線）の六つのみだ。

そこで主な地名で比較してみると、下のような表ができる。

	列A (中国)	列B (中国)	列C (日本)	列D (日本)
	方角+地名 (名詞)	地名 (名詞) + 方角	方角+地名 (名詞)	地名 (名詞) + 方角
行A	北京、南京	山东、山西	東京	関東、関西
行B			北広島、東広島、東大阪、西東京	
行C		华北、华南、华东 苏北、陕北、浙东 河北、河南、江南、 江东、江西、湖北、 湖南、广东、广西	北摂、北総、北越、 南紀、西武、東武、 東予、西予、東播、	湖北、湖東、湖南、 湖西、泉南、泉北、 湘南、摂南、洛南、 洛北、洛西、洛東、 備北、備南

行Aの場合は、ある地点を座標点としてどの方角にあるかを指していると考えられる。座標点は暗黙の了解とされ、明示されていないが、北京、南京の場合は長安、洛陽などともともと都がおかれていた中原地域だし、山東、山西は華北地域の平野部と山地部の境界線となっている太行山脈が座標点になっている。日本語の関東や関西も同じ発想の命名なのだが、座標点がいまひとつはっきりしない。

行Bは、行Aと同じようにある地点を座標点にどの方向にあるかを指しているのだが、違いは被修飾語の部分が座標点になっているという点だ。例えば東広島（市）の場合なら、被修飾語の広島（市）を座標点にその東に位置する町であるということを示しており、広島（市）の内部の東部分という意味ではない。北広島、東大阪、西東京もすべてこれと同

じ理屈が当てはまる。

行Cになると、日本語と中国語では異なった現象が生まれている。

行Cの「地名+方角」の場合、中国語では、「方角」は「地名」の示す一定の範囲の中で相対的にどの位置にあるかということを示している。鉄道駅の命名と同じ発想だ。すべて列Bに格納できる。

华北、华南というのは明らかに中華という地域の内部で相対的にどの位置にあるかを示している。苏北は江蘇省内部の北の部分だし、浙东は浙江省内部の東の部分。江南や河北もそれぞれ長江下流域という広い範囲の中での南部、北部ということで、長江の南、黄河の北ではなさそうだ。長江の北にある揚州や南通も江南地域に入るし、黄河は河北省から相当離れて、河南省の真ん中を横切っていく。江西は長江の西ではなく、南宋の時代に置かれた江南道の西部ということから名づけられている。湖北も元代の湖広行道という行政区画の中の北部ということからきていると考えられる。

しかし、日本語では、例えば摂津国の中の南部地域を「摂南」というように「地名+方角」で示す一方、北部は「北摂」と「方角+地名」と逆順に語を並べている。列C及び列Dに格納され、この列Cと列Dを分別する「法則」は見いだせない。

中国語では東南西北と太陽の見かけの動きに沿って天全体をぐるりと俯瞰的に見渡すようにして並べることに明らかなように、全体から部分へという視点が貫かれているのに対し、日本では東西南北と、お日さまの昇る方向、沈む方向、温かい風が吹いてくる方向、冷たい風が吹いてくる方向というように話題凝視型で並べている。このような観察視点の違いが地名表示の違いに現れてきたのか、気になるところである。

#### (4) なぜ「不有」と言わないのか。

中国の街を歩いて感心するのはどんな小径にも名前がついていることだ。そこにモノがある以上は名前を付けて他のモノと分別するというのは認識の「基礎段階」といえるものだが、どんな小径も名前を持っているというのが驚くところだ。さて、「あそこにも道があるね」という場合、「那样的地方也有条路」と言う。この「有」という語の語義はもとも「所有」を表す語だったのか、あるいは「存在」を表す語だったのか、これはこれで非常に興味深いものなのだが、どちらにしても否定する場合は「不有」と言わず「没有」という。考えれば、不思議なことだ。

人は、何かが視界に入ったとき、その何かが「ある」と認識する。「ある」という認識があるからこそ、その何かが視界から消えたあと、「ない」という認識が生まれる。その逆ではないはずだ。また、「ある」、「ない」は二律背反で、中間点というものは成立しえない。

この状況認識を表す言葉が「有」であり、「无（無）」である。したがって「有」を否定する場合、二律背反的であるがゆえに、否定副詞+「有」という形式を使う必要はなく、「无（無）」一語で十分である。

无事不登三宝殿（用事がなければわざわざ来ないよ）

此地无银三百两（ここには300両もの大金は（埋まって）いないよ）

下線部の反対は言うまでもなくそれぞれ有事、有银だ。

「没法(子)」とか「没办法」などというが、これは「无法子」、「没办法」のことであり、「没」も「无」もそれぞれ一語で「ない」という意味をもっていることは明らかだ。

「没」は「没有」の省略形だとよくいうが、そうではなく、「没」一語で済むのに、わざわざ「有」が加わり「没有」という表現が生まれたと考える方が論理的ではないかと思えてしかたない。つまり「无」を否定副詞+動詞という形式で表すために、こういう現象が生まれた、ゆえに「不」が入ってくる余地はなかった、と考えるほうが辻褃があうのではないか。「没」には「なくなる,失わせる (mo)」という意味もあるため、「有」と結合することに抵抗がなかったと思われる。このように考えていかないと、「不有」が成立しない理由を、人間の主体的意思ではコントロールできない客観的存在を、意志否定の意を含む「不」を使って否定することが避けられたのだという理屈しか生まれず、矛盾をきたすと思えるのだが、この辺りは学習したいところだ。

#### (5) 「给我」に対する感覚

「われ思う、故に我あり」。デカルトの名言といわれているものだ。

春秋戦国時代の中国ではいろいろな学派が競って政治論、哲学論を展開したが、こういう論の立てかた、つまり「我」を前面に押し立てて論理を展開していた人がいたかなあと、考えてもすぐには思いつかない。

ところが、面白いことに辞書によれば、「给我」という句を動詞の前に置いた場合、その動作を強調するという説明がなされている。実際にどう使われているか。下は、明朝時代を舞台にした人気TVドラマ『后宫』で、官憲がお尋ね者を捜索し、その隠れ家へ乗り込んだとき、部下に対して発している指示だ。

把这里给我包围起来！　ここを取り囲むんだ！

给我抓！　(そやつを) ひっとらえろ！

把她给我看住了，给我搜！こいつをしっかりと見張っておくんだ。(あとの者を) 捜せ！

都给我搜得仔细点！　ぜんぶ詳しく搜すんだ！

上のセリフはほぼ連続して用いられており、くどいと思えるほど「给我」が繰り返される。TVドラマ『精忠岳飞』に到っては金王朝との戦闘場面が数多くあるが、どちらの側も突撃するときは将領が「给我杀！」と大声を張り上げている。すべて「给我」だ。直訳すれば、「俺のために」となるのだが、動作を強調するにしても「给我」というこの感覚が日本語母語話者の私には思いもよらないことだ。

ましてや「我的天！」(何たることだ！)という表現など、少なくとも伝統的世界観では皇帝しかその意思を代弁し得ない「天」に対し、「我的」(わたしの)と表現できる「我」の強さに恐れ入る次第である。英語にも「Oh! My God!」(何たることだ)という表現があるが、これはあくまで「神と人との契約」関係を背景にしているからこそ、生まれ得る表現だと考えている私にとって、中国語の「我的天！」という表現に込められた、「我」と「天」との関係はどのようなものなのか、実に興味津々たるものがある。単に英語を引きうつして生まれた表現なのだろうか。

確かに中国人は自己主張をはっきりするといわれるが、一方では謙譲、謙虚を美德とする伝統的価値観も根付いている。この「给我」と語られるとき、どの程度まで「我」と

というのが意識されているのだろうか。

以上は気になることのほんの一例に過ぎず、疑問はそれこそ山ほどある。

被害を強調する介詞「被」とそれとは反意になる「給」が一部の受動文で共起できるのはなぜなのか。

文語の名残りといわれる「于」介詞句が動詞に後置されるのに対し、現代語では「于」介詞句に代わる連用介詞句は動詞に前置されるようになっているが、この大規模な変化はなぜ起きたのか。

能願動詞を使う表現と可能補語を使う表現はどちらが先に生まれてきたのか。

歴史的に中国語は北方異民族に支配されたときを中心に大きな音韻変化<sup>5</sup>を起こしているといわれるが、語法において他言語の影響を受け変化することはなかったのか。

など数え上げればきりが無い。

しかし、それだけに謎解きに挑戦するのは面白く、故郷に帰ったあとは、諸氏に負けないうよう学び続けたいと思っている。

以上、紙面の品位を貶めたのではないかと危惧しているが、今後の学習決意を表明して筆をおくとともに、これまで、先輩や同僚諸氏をはじめ関係者の方々から厚誼を賜ったことに、心から謝意を表したい。

<sup>1</sup> 春秋戦国時代の呉や三国時代の呉のとき、金陵、建業といった名で首都がおかれたことがあるが、いずれも地方政権。統一国家としての南京に首都がおかれたのは、明の洪武帝の時代。北京は大都としてモンゴル帝国の首都になっている。

<sup>2</sup> 実際には、感嘆音の hng、方言でしか現れない rua といったいわば例外的な「音節」で発音される 17 字を取録しているため、これらを除くと 9,455 字となる。

<sup>3</sup> 全組み合わせから、鼻母音を含まない音節だけの組合せを差し引けばいい。すなわち、 $89,075,844 - (9,438 \cdot 3,567)^2$  で計算される。

<sup>4</sup> 国家统计局设管司「最新县及县以上行政区划代码（截止 2015 年 9 月 30 日）」による。

<sup>5</sup> 隋唐の前の南北朝時代、南宋時代、元、清時代など華北地域あるいは中国全土が北方遊牧民族の支配下にはいり、その影響を受けて大規模な音韻変化が起きたといわれている。



**西川孝次教授**

1951年11月7日生

---

**Professor NISHIKAWA Koji**

Born in November 7, 1951

---

**経 歴**

---

- |         |  |
|---------|--|
| 1977年3月 | 大阪外国語大学外国語学部卒業   |
| 1977年4月 | 宇治高等学校（現：立命館宇治高等学校）教諭  |
| 1994年8月 | 立命館宇治中学校・高等学校 教諭（組織変更に伴う発令）  |
| 1998年4月 | 立命館宇治高等学校 教頭   |
| 2001年3月 | 立命館慶祥中学校・高等学校 教諭<br>立命館慶祥中学校・高等学校 副校長  |
| 2004年4月 | 立命館大学中等教育部 教諭<br>立命館アジア太平洋大学（APU）出向 教諭   |
| 2005年4月 | 立命館大学初等中等教育部（移籍）教諭（組織変更に伴う発令）<br>APU 教育開発・学修支援センター<br>APU 言語インスティテュート事務局長  |
| 2006年4月 | 立命館大学初等中等教育部（出向解除）教諭   |
| 2008年4月 | 一貫教育部（組織変更に伴う発令）   |
| 2011年4月 | APU 教学部副部長<br>APU 言語教育センター長<br>APU 孔子学院副院長   |
| 2012年3月 | 定年退職   |
| 2012年4月 | 立命館アジア太平洋大学言語教育センター特別招聘教員（教授）<br>APU 教学部副部長（2017/3/31まで）<br>APU 言語教育センター長（2017/3/31まで）<br>APU 孔子学院副院長（2017/3/31まで） |
| 2017年3月 | 退職   |
-

## Career

---

March 1977	Graduate from Osaka University of Foreign Studies
April 1977	Teacher, Uji (Now, Ritsumeikan Uji) Senior High School
August 1994	Teacher, Ritsumeikan Uji Junior and Senior High School (Appointment in line with reorganization)
April 1998	Vice Principal, Ritsumeikan Uji Senior High School
March 2001	Teacher, Ritsumeikan Keisho Junior and Senior High School Vice Principal, Ritsumeikan Keisho Junior and Senior High School
April 2004	Teacher, Ritsumeikan University Division of Secondary Education Teacher, Ritsumeikan Asia Pacific University (Secondment)
April 2005	Teacher, Ritsumeikan University Division of Primary and Secondary Education (Transfer; appointment in line with reorganization) APU Education Development and Learning Support Center Secretary-General, APU Language Institute
April 2006	Teacher, Ritsumeikan University Division of Primary and Secondary Education (Secondment ended)
April 2008	Division of Integrated Primary and Secondary Education (Appointment in line with reorganization)
April 2011	APU Associate Dean of Academic Affairs Director, APU Center for Language Education Deputy Director, APU Confucius Institute
March 2012	Mandatory retirement
April 2012	Specially-Appointed Professor, Ritsumeikan Asia Pacific University Center for Language Education APU Associate Dean of Academic Affairs (until 2017/3/31) Center for Language Education (until 2017/3/31) Deputy Director, APU Confucius Institute (until 2017/3/31)
March 2017	Retirement

---